白百合女子大学 言語・文学研究センター

NEWS LETTER

Αυριον

ニューズレター「アウリオン」
2024　JULY　vol. 43

 # BRAND NEW

あたらしい明日と、それから。

センター長コラム

白百合の原点を訪ねて

言語・文学研究センター長　平尾 桂子

昨年の夏、白百合学園の設立母体であるシャルトル聖パウロ修道女会（SPC）の発祥の地を訪ねる機会を得ました。パリで音楽教師をしている従姪（いとこの娘）が遊びに来ないかと誘ってくれていたので夏の休暇はフランスで過ごそうと決めていたことと、せっかく白百合女子大学に奉職したのだから、その原点を見てみたいと思い立ったわけです。かっこよく言えば「自主 FD」とでも言えましょうか。私と私の娘、そして従姪と私の従兄弟の妻という不思議なメンバーの、聖地巡礼の旅でもありました。

巡礼団　SPC 最初の教室にて。中央がご案内くださったスール米島

シャルトル聖パウロ修道女会は、17 世紀末の 1696 年に、シャルトルの郊外にあるルヴェヴィルという小さな村で誕生しました。郊外といっても、電車もバスも通っていない、今でも人口わずか 225 人の寒村です。フランスの絶対王政の下、極貧にあえぐこの村に、30 歳の若い司祭として赴任したルイ・ショーヴェ神父の指導のもと、村の娘 3 人が共同生活を始めたのが SPC の始まりです。修道院の地下には教室がつくられ、そこで村の娘たちに読み書きや手仕事を教えたのが、今に続く白百合学園の原点となっています。そこで学ぶ娘たちは、勉強が終わるとスープを作り、近隣の貧しい人々に届けにいったと伝えられています。

ルヴェヴィル村のシンボルの風車

土間床と土壁の粗末な教室で始めたささやかな営みが、300 年後には、日本も含め世界の 40 以上の国と地域で 4,000 人以上の修道女を擁する大きな組織に成長するなどと、誰が想像できたでしょう。しかも、ショーヴェ神父を創設者として仰ぐ修道会は SPC だけでなく、SPC から派生した修道女会がヨーロッパ各地に数多くあり、今でも多くの人が訪ねる「聖地」となっているそうです。

村の教会にはショーヴェ神父の墓があり、その墓碑を見てびっくりしました。1710 年、なんと、46 歳の若さで亡くなっているのです。

ルヴェヴィルで活動したのはわずか 16 年。共同体を作ってから 14 年という短さです。

ショーヴェ神父の墓の横には、彼の呼びかけに応えた村の娘たちの墓もありました。一人は 1702 年、もう一人は 1703 年に、共同体ができてわずか数年後に、最初のメンバー 3 人のうち 2 人が相次いで亡くなっているのです。手塩にかけて育てた後継者に先立たれたショーヴェ神父の悲しみは、いかほどだったことでしょう。このとき、共同体は存亡の危機にあったことは間違いありません。

その後、フランス革命の動乱も含め、数多くの困難を乗り越えた修道女の末裔が、キリスト教禁教令が解かれた明治時代の日本に招かれて作ったのが、現在の白百合学園なのです。

ショーヴェ神父が蒔いた種は、今日、私たちの教室で芽吹いています。

蒔いた種が芽を出す保証はどこにもないけれど、蒔かぬ種から芽が出ることは絶対にありません。300 年前に蒔かれた種が大木になっていること。そして、木々が常に種を落としているから森があるということ。そのことを想い、私も種を蒔き続けようと思います。

世界に広がる SPC の活動拠点

センター員寄稿

400年前に日本にやってきた英国人の足跡をたどる

英語英文学科 教授　ティム・ナイト

コンピュータの前で勉強したり、図書館で資料を調べたり、たくさん歩いたりした。

歩くのは、安土城跡、関ヶ原の合戦跡、角館の武家屋敷など、特に日本の歴史と社会に関連したさまざまな史跡を探索することが主だった。

しかし、最も歩いたのは、最初に日本に来たイギリス人、ウィリアム・アダムスに関連してであった。彼は三浦按針として知られ、ジェームズ・クラベルの小説『将軍』でフィクション化されている。最近、ディズニー・プラスで新しいテレビドラマが放映された。私は、1600年にオランダ船デ・リーフデ号の航海士として、彼が最初に上陸した大分県の浜辺を訪れた。そのビーチを訪れた時の様子はこちらでご覧いただけます。

私は、日本のアダムスゆかりの地と、彼の故郷であるイギリスを歩いた。ケント州のジリンガムにある彼を記念するモニュメントは、1930年代にイギリス人と日本人のファンによって建てられた。

ウィリアム・アダムスの故郷、イギリスのジリンガムにあるウィリアム・アダムスの記念碑の前で

当時は閑静な住宅街だったが、現在はロンドンとイングランドの南東海岸を結ぶ交通量の多い道路に面している。彼が洗礼を受けた教会で、私は牧師と話した。彼女は、1564年にアダムスが赤ん坊のときに洗礼を受けたのと同じ、教会の洗礼盤を見せてくれた。

ウィリアム・アダムスが1564年に生まれて数日後に洗礼を受けたのと同じ教会のフォント

そこから私はジリンガム、チャタム、ロチェスターの町を歩き、アダムスが少年時代にメドウェイ川の造船所で船の上で働き始めた場所だ。最後にストルードの町で、私はメドウェイ・アーカイブ・センターで2、3日過ごした。そこで私は、アダムスの驚くべき生涯を偲ばせる、イギリスと日本のさまざまなフェスティバル、文学プロジェクト、歴史プロジェクト、建築プロジェクトに関するたくさんの資料を調べた。

ウィリアム・アダムスの故郷に近いメドウェイ公文書館の外

ロンドンに戻り、大英図書館で、17世紀初頭にイギリスの東インド会社で働いていたアダムスや他のイギリス人貿易商が日本から送ったさまざまな手紙を調べた。

大英図書館での勉強は、工事が続く中での挑戦だった

私は長崎県の平戸で、それらの貿易商が働いていた場所を歩いた。また、アダムスが徳川家康のために船を建造した静岡県伊東市の公立図書館で、アダムスに関連する興味深い本を見つけた。

それ以外の時間は、言語教育における最新の発展についての知識を得るために費やした。その多くはコンピュータを使って行った。ChatGPTを含む人工知能は、言語教育と学習の世界で重要な機能になってきている。教師や学習者のために使える便利な機能がたくさんあります。危険もあります。私はこれらに関するオンラインコースをいくつか受講した。

私のもうひとつの興味は、会話がどのように機能するかということである。今回、教師と言語学習者のために会話分析を使うための再教育コースを受講した。これは、数年前に勉強した東京のテンプル大学ジャパンを通じてだ。有意義で楽しいサバティカルでした。

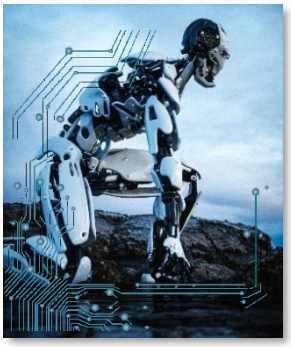
センター員寄稿

ベルナノスの聖なる機械を求めて…

フランス語フランス文学科准教授　トリスタン・ブルネ

この一年間の特別研修では、「技術のイメージとしての巨大ロボット」をテーマにする研究をおこないました。

基本的に、研究を二つのレベルで進もうとしました。



一つ目のレベルは、フランスの作家ジョルジュ・ベルナノスをはじめとして、色々な思想家に注目するような研究を通して、彼らが見せた技術のイメージを通して、その技術の批判的ないし政治的な把握を見出して現代支配的な位置にある技術理論―最近は AI/生成的人工知能―を別な視点から見る可能性を探る目的です。

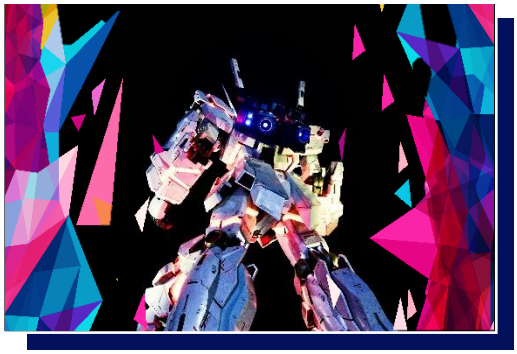
その一つ目の論文は、カトリック教の作家ベルナノスのエッセー「フランス対ロボット」を中心にし、彼の「機械の文明」の批判を分析し、その中に出てくる「巨大ロボット」の隠喩をどういう風に位置づけるべきなのかを追求する論文です。ベルナノスの宗教的で美学的で政治的な批判のもとに、その裏にぼんやり見解できる「聖なる機械」は、ベルナノスによって現代社会の生み出す奴隷ではなく英雄を生み出す機械としての「巨大ロボット」のイメージを把握できるように結論します。

ベルナノス以外は、同じく隠喩として「巨大ロボット」を扱った同時代のフランスてる学者ベルグソンの技術論にも同じ分析を行って、他に現代技術の問題と特徴を分析しようとしたほかの 20 世紀の思想家（ドイツ人のギュンター・アンデルス、日本人の登坂淳や三木清など）をとおして、その技術に関する思想はどういう風に「巨大ロボット」というフィギュアーに繋がるのかを明らかにしようとします。

二つ目のレベルは、上の仕事のもとに「巨大ロボット」を技術の想像上のイメージとしてどういう風に機能している、という分析を一つの本でまとめる企画です。そこには、日本のアニメーションを中心に特に 70 年代から 90 年代まで（マジンガーZ から機動戦士ガンダムをかけて新世紀エヴァンゲリオンまで）盛んであったそのイメージをどういう風に扱われたのか、又どういうふうに変化したのか、を分析する企画です。日本のアニメで有名になった「巨大ロボット」だけではなく、その周りにも（イギリス、アメリカ、フランスとかで）登場した同じような機械を通して、そのイメージの特徴と矛盾をより深く探る研究でもあります。

他にそのテーマに関連する活用としては、NHK の番組「世界サブカルチャー史」のために 90 分のインタービューを通して、フランスと日本の想像をどういうふうに「巨大ロボット」というフィギュアをめぐって接触することが出来た、というテーマに注目。ＢＳで 4 月 13 日に放送されました。後期に地デジで三回にわけて再放送されるよていであります。

又は、ＫＤＤＩ様の番組「リベラリー」のためにも 90 分のインタービューをさせていただいて、三回で放送する予定であります。その番組はリベラルアーツをビジネスパーソンのために発表するコンセプトです。そこにも、日本のサブカルチャーはどういう流れでフランスで受け入れるようになりましたというテーマの中に、「巨大ロボット」のイメージの役割について話すことになりました。



第五回 佐々木みよ子賞 授賞式報告

受賞論文 「もの怖ぢせぬ」男君と「虫めづる」姫君―『堤中納言物語』「虫めづる姫君」考―

2024年1月15日（月）、本学クララホールにて、第五回佐々木みよ子賞の授賞式が開催されました。会場には、学長、副学長をはじめ、研究科長、専攻長、そして今回の佐々木みよ子賞選考に携わった選考委員の先生方もお祝いに駆けつけ、あたたかな雰囲気で執り行われました。

＊先生方の肩書きは2023年度当時のものです。

お祝いの言葉を述べられる髙山学長

若狭祥子さん受賞コメント

言語・文学研究センターの研究員として所属しております、若狭祥子と申します。大学時代から現在に至るまで、『源氏物語』や『堤中納言物語』など中古に成立した物語文学について研究しています。

この度、大変光栄なことに、第五回佐々木みよ子賞を頂戴しました。一月の授賞式から数ヶ月が経った現在もなお、この事実に恐縮しております。この賞は、さまざまな方々のお力添え、とりわけ、指導教員であった室城秀之先生（元・国語国文学科教授、現・名誉教授）のご指導とご助言によるものが大きいと思います。この場を借りて、改めて感謝を申し上げます。

賞を頂戴した論文「「もの怖ぢせぬ」男君と「虫めづる」姫君―『堤中納言物語』「虫めづる姫君」考―」（「言語・文学研究論集」第23号、白百合女子大学言語・文学研究センター、二〇二三年）は、『堤中納言物語』に収められている他作品と比べて、「虫めづる姫君」という作品には恐怖の表現が多く見られることを皮切りに調査を始めました。

恐怖の表現が、虫をかわいがるといった、周囲の人々とは異なる姫君の言動に寄せられることに違和感はありません。しかし、姫君に近づく男君に対して、「もの怖ぢせぬ」恐怖しないといった表現も用いられているとなれば話は変わります。作者は、恐怖の表現を多用することによって、表現したいものがあるのではないか、そのように感じられました。

本論文では、「言葉や表現のちょっとした疑問を見つけて、掘り下げる」という室城先生のもとでの学びを活かすことができたかと思います。しかし、さまざまある恐怖の表現から、なぜ「怖づ」「もの怖ぢす」が選ばれたのか、他作品からの明確な影響はあるのかなど、まだ論述の余地があります。この度の受賞に甘んずることなく、より確かな論述にするため、また、日本の古典文学のさらなる発展に向けて、研究を続けて参りたいと思います。

受賞者からの
お言葉を読む
若狭さん

授賞式に
列席の先生方と
若狭さん

第五回佐々木みよ子賞選考委員長
室城秀之先生からお祝いの言葉

若狭さん、佐々木みよ子賞の授賞おめでとうございます。

古典文学を研究する際に私自身が大切だと考えている、写本からみずから本を立てて考えること、具体的には、句読点のつけ方、会話文・心内文の認定などを通して、作品の言葉から問題点を探るという基本の研究姿勢をしっかりと守って書かれた論文として、選考委員全員からも評価されました。

学科内で報告した際も、若狭さんなら授賞して当然だと受けとめてもらえました。

現在、『堤中納言物語』の研究はけして盛んとはいえませんが、若狭さんの今回の論文が学会に一石を投じることができればと期待しています。

とはいえ、まだまだ学術論文としてはあまいところもあるので、この賞を励みにして今後も精進してほしいと願っています。

若狭さんが佐々木みよ子賞を受賞なさった時の言語・文学研究センターのセンター長としても、長年若狭さんの研究の指導をした者としても、若狭さんの授賞をとてもうれしく思っています。

簡単ですが、これをお祝いの言葉にかえさせていただきます。

最後にもう一度、若狭さんおめでとう。

受賞論文は、言語・文学研究センターのホームページ＞刊行物＞言語・文学研究論集＞学術機関リポジトリから閲覧できます

佐々木みよ子賞について

言語・文学研究センター初代センター長をつとめた、佐々木みよ子先生のご遺志に基づき創設された研究奨励賞。本賞は、言語・文学分野の優れた論文に贈られます。当センターでは2019年度から毎年、佐々木みよ子賞の応募論文を受け付けております。

選考対象

Ⅰ．白百合女子大学大学院博士課程言語・文学専攻生および同専攻の研究生。過去に在籍していれば、現在の言語・文学研究センターへの所属（研究員、準研究員、委嘱研究員）の有無は問いません。ただし、現在、大学での専任職を得ている方を除きます。

Ⅱ．前年度の『言語・文学研究論集』（言語・文学研究センター刊行）に掲載された論文（共著を含む）は自動的に候補論文となります。また、自薦・他薦による、他の学会誌等へ掲載された論文は前年度を含め三年間遡ることができます。

賞

賞状および賞金として一論文につき20万円を授与いたします。共著の場合は、執筆者の人数で分割して授与いたします。

応募受付期間

毎年4月1日から5月31日の2ヶ月間

＊詳細は言語・文学研究センターのホームページをご覧ください。

2023年度談話会

博論を書こう
──博士号を取るために

講 師：鄭 艶飛先生・大塩 香織先生
日 時：2024年1月23日(火)
16時30分～18時
開催方式：Zoomによる
オンライン開催

博士号を取得するために最も重要なのは、博士論文を書き上げて審査に合格することである。しかし、博士論文の執筆計画、指導教員との相談、投稿論文の文量(長さ)など、博士課程の道のりにはさまざまな不安があり、挫折感や閉塞感を伴うことも多く、心身に無理を強いるケースもある。

大学院生をサポートするために、本センターでは本学で博士号を取得した鄭艶飛先生および大塩香織先生を講師としてお迎えして、「博論を書こう──博士号を取るために」と題した座談会を開催した。

鄭先生は、2014年3月に博士論文「日本漢語に於ける四字熟語化に関する研究ー中古・中世の土地所有語彙を軸として」で博士号を取得し、現在中国河北民族師範学院外国語学部で専任講師としてご活躍されている。大塩先生は、2020年5月に博士論文「遠藤周作論ー他者評価から解放された〈私〉を求めてー」を提出して博士号を取得した後に、韓国釜山大学日語日文学科で客員教授として日本語教育に携わっている(談話会当時)。

二人の講師は専門分野が異なるが、自分自身の博士課程を振り返り、博士論文の思考プロセスや執筆のスケジュール、現地での資料調査、学術誌への論文投稿、メンタル管理などに関してご自身の経験を参加者に紹介した。

特に深く印象に残ったのが、論文投稿や研究などの悩みに対して、二人の講師は自分一人で抱え込まずに積極的に指導教員、仲間、周りの人にアドバイスを求めながら、モチベーションを保ち続けたこと。博士課程に進学すると、自分独自の研究に没頭するが、博士論文の執筆は孤独な作業ではなく、指導教員や関連する研究領域の専門家との交流や協力が不可欠であり、家族や友人からのサポートや理解も重要である。博士論文に向き合った経験は、単なる学術的な成果を得るだけでなく、独立した研究者や教育者としての成長にもつながるはずである。

今回の談話会は、本学言語・文学専攻(博士課程)主任・伊東玉美先生にご参加いただくとともに、博士論文の執筆や博士号の取得に関心のある５名の方が集まった。Zoomによるオンライン開催で、穏やかな雰囲気の中で会話が弾み、通常では聞くことができない様々なエピソードについて話が盛り上がった。談話会の後、参加者からは「今後は積極的に雑誌にも論文を執筆したい」「先生との相談や研究を頑張ってみたい」「お二人の経験からの言葉がとても刺激になった」などのコメントが寄せられた。

（本センター助手　姚 紅）

Annual activity report 2023

第48回講演会
2023年６月14日（水）16時20分～17時50分
「プルースト『失われた時を求めて』における庶民の言説」
講師：吉川 一義 先生（京都大学名誉教授）
コメンテーター：池田 潤 先生（京都大学国際高等教育院）

談話会
2024年１月23日（火）16時30分～18時
「博論を書こう──博士号を取るために」
講 師：鄭 艶飛 先生　大塩 香織 先生

言語・文学研究論集 第24号
（2024年３月刊行）

アウリオン叢書 第22号
「世界文学としての日本文学」
（2024年３月刊行）

ニューズレター「アウリオン」
第41号（2023年７月刊行）・第42号（2023年12月刊行）

近代文学研究会活動報告

プロジェクト
活動報告

本センター研究員　大塩 香織

令和5年後期の「近代文学研究会」の活動も無事に開催できましたので報告いたします。本研究会は私がまだ修士課程の大学院生のころに、当時在籍していた先輩方と大学院の授業の後に先輩がおっしゃった「自分の研究だけをしていては足りない。幅広い視野を持とう」というお言葉から発足した研究会です。その後、言語・文学研究センターのご支援もあり、参加者の入れ替わりやオンラインへの切り替えなど、紆余曲折ありましたが発足から10年が経っても継続して開催できていること、大変ありがたく思います。

令和５年後期もオンラインにて開催しました。

使用したテキストは以下の通りです。

宮沢賢治「猫の事務所」

山川方夫「夏の葬列」

小島信夫「アメリカン・スクール」

村上龍『限りなく透明に近いブルー』

吉行淳之介「ある脱出」

川端康成「母国語の祈禱」

太宰治「きりぎりす」

宮沢賢治「猫の事務所」は以前ゼミ内で発表があった作品ですが、改めて読み直そうと選んだ作品です。山川方夫「夏の葬列」は参加者の齋藤さんからご提案があったもので、中学校の国語教科書にも掲載されている作品です。小島信夫「アメリカン・スクール」は第三の新人の中でまだあまり扱っていない作品をしようと選出した作品です。村上龍『限りなく透明に近いブルー』は芥川賞受賞作を読もうと選んだ作品です。吉行淳之介「ある脱出」は、前出の村上龍『限りなく透明に近いブルー』の芥川賞選出委員の作品を読もうと選ばれた作品です。川端康成「母国語の祈禱」は川端康成の『掌の小説』の中からあまり読まれることのない小説として選出しました。この「母国語の祈禱」に登場する「きりぎりす」に着目し、太宰治「きりぎりす」に関しても議論しました。

本研究会では、現在も参加者を募集しております。ご参加を検討されている方の中で現在論文執筆をしていない方でも、文学作品に触れる機会として、また論文を書き始める機会として、ぜひ研究会をご活用いただきたいと思います。もちろん修士課程や博士課程に在籍中の方も歓迎いたします。研究会は毎週約1時間半のオンライン研究会を行っています。隔週でのご参加、長期休み中のみのご参加などでも構いません。

開催日時は現在、月曜日の19時から試験運用中です（土曜日15時から変更になりました）。またこれまではZoomを使用しておりましたが、現在Google meetへ移行中です。

参加を希望される方は今後の予定などをお送りしますので、以下のアドレスまでお気軽にご連絡ください。

[redacted]

↖夏の葬列／山川方夫／集英社文庫

↑村上龍／限りなく透明に近いブルー／講談社

←吉行淳之介／香水瓶―娼婦小説集成／潮出版社

フランス語教育研究会

2023年度 小学生のためのフランス語教室 プチテコ・プランタン 開催報告

プロジェクト活動報告

フランス語フランス文学科准教授　大塚 陽子

2024年３月２日・３日の二日間、小学生のためのフランス語教室「プチテコ・プランタン」を開催しました。16人の児童が学生スタッフと共に楽しくフランス語を学び、教室の最後に行われたプチ発表会でその成果を披露しました。発表を終え、参観者から拍手喝采を浴びた児童たちは皆清々しい笑顔で、フランス語を使って目的を達成できた喜びに満ち溢れていました。参加児童の達成感は私たちスタッフの達成感にもつながります。会場全体が大きな幸福感に包まれる瞬間を今回も体験することができ大変うれしく思っています。

プチテコを支えるのは学生スタッフです。今回は５人の院生スタッフと10人の学部生スタッフが力を合わせて教室を成功に導きました。

各回のテーマや教室で使用する主な学習表現は院生スタッフの話し合いで決まります。今回のテーマは「フランスの四季を楽しもう！」で、季節や天気にまつわる表現を主な学習表現とすることにしました。テーマや学習表現が決まると、次はアクティビティを考えます。各アクティビティの担当者は他のスタッフたちの助言や協力を得ながら実際の教室で実施できるように準備を進めていきます。指導方法や内容を検討し合ったり、指示の伝え方を提案し合ったり、教材や教具を作ったりと、当日までにすべきことが山ほどあります。普段は顔を合わせることのない院生と学部生が一緒に行う活動ですから、決して多いとはいえない話し合いや作業の機会を有効に活かす工夫も必要となります。もっとも大切なのはチームワークでしょう。立場や学年の差から生じる上下関係を作らないのがプチテコスタッフの心得！ 今回のメンバーは特にこの意識が高く、なんでも言い合える明るい雰囲気が印象的でした。

教室で行うアクティビティは歌２曲、クイズ２種類、ゲームそして劇で、希望者は劇の代わりにスピーチに挑戦できます。中でも人気だったのは歌です。ギターが弾けるスタッフが演奏で華やかさを演出しました。覚えやすいフレーズとかわいらしい振り付けも児童の心を掴んだようです。また、学習表現を使って楽しむ２つのゲーム（フルーツ・バスケットをアレンジした「季節バスケット」と、探しているシールを季節の妖精にもらいに行くゲーム「四季の妖精」） も好評で、児童たちは覚えたての表現でのやり取りを楽しんでいました。

発表会で披露した劇のシナリオは、大学院の授業「フランス語教育研究B」で作成したオリジナル作品で、季節の風物を子どもたちが見つけ楽しむというストーリーです。少し難しいのではないかという私たちの心配をよそに児童たちは元気に演じることができました。児童の練習用に作成した紙芝居動画をYoutubeで公開しています（QRコードからアクセス可能）。

そして今回もスピーチに挑戦した参加者がいました。「アウリオン」第42号でも報告したプチテコ・オンラインの受講者３名です。１年間のフランス語学習の成果を感じることができました。

参加した学生スタッフからは、「子どもに教えるということが初めてで不安もあったが、楽しく目標を達成することができてよかった」「１年生から院生まで全員でプチテコを創り上げることができたと感じ、子どもたちの笑顔や先生方の言葉から、今年も参加してよかったと心の底から思った」といった感想が聞かれました。スタッフの多くが今後の活動への参加を希望しています。

英語圏文化・文学コロキアム

プロジェクト活動報告

2023年度第２回英語圏文化・文学コロキアム
2023年11月20日（月）16:30〜18:00

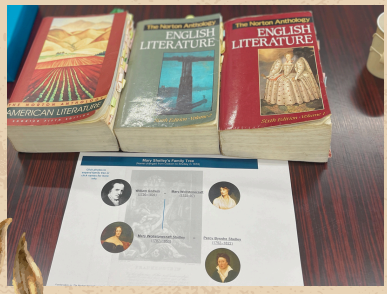
英語英文学科教授　水越 あゆみ

去る2023年5月29日、5年以上もの間活動を休止していた「英語圏文化・文学コロキアム」が再開されました。発表者は不肖水越、イギリスの詩人ジョン・キーツの長編物語詩を題材に、文学的価値が如何に、そして何故ジェンダー化されているのか、というテーマについて、大学院生1名を含む5名のオーディエンスとの間で活発な議論が交わされました。さて、再開後2回目となるコロキアムでは、当該プロジェクトの2023年度責任者である米田ローレンス正和先生が発表者の任を負ってくださいました。従いまして、今回は水越が活動報告を担当させていただきます。

米田先生は、イギリス・ロマン主義時代の文学、特に詩人パーシー・ビッシュ・シェリー（1792-1822）を研究対象としていらっしゃいます。"On Not Achieving Poetic Fame: Romantic Selfhood, the Publishing Market and Percy Bysshe Shelley"（「近代出版市場における詩人の価値――ロマン主義詩人シェリーの場合」）というテーマの今回の研究会には、嬉しいことに、前回を上回る8名の参加希望が寄せられました。内訳は、英語英文学科の専任教員6名、博士課程の大学院生1名、そして、（本学の博士課程御出身で、非常勤講師として本学の教壇にも立ってくださっている）言語・文学研究センター研究員1名です。それぞれの専門研究分野は、イギリス文学、アメリカ文学、アメリカ史、英語教育、と多岐にわたりますが、自由闊達な雰囲気の中、洞察力に富んだ学際的なコメントが飛び交い、the Republic of Letters とは本来このようなものではないか、との思いを強くいたしました。

米田先生の発表は、北西ヨーロッパが宗教改革を経て「内面」を備えた近代的個人を確立していくプロセスを概観し、その歴史的文脈においてシェリーの「詩人としての自己」がどのように構築され、また変容していったか、*Alastor*（1816）および *Adonais*（1821）という二編の詩を比較しながら論じる内容でした。明快な議論の展開もさることながら、米田先生による音読に皆が聴き入る場面もあり、「詩」とは文字ジャンルである前に音声ジャンルである、と、実感させられる貴重な機会となりました。

本コロキアムは今後も、半期に1回以上の研究会開催、センター構成員のアカデミックな交流の推進を目標に活動してまいります。発表者あるいはオーディエンスの一員として、どうぞお気軽に御参加いただければ幸いに存じます。



Hot news & Book info

言語・文学研究センターから、今注目の最新情報をお届け。

2024年度オムニバスB

交差点 (クロスロード) としてのジェンダー

2024年度後期 火曜5限開講 (初回9月24日)

コーディネーター：平尾 桂子先生 (英語英文学科)

授業概要：ジェンダーは、社会的、文化的、心理的な要素から成る性のあり方を意味します。個人のアイデンティティーや社会的な役割、行動、文化的な意味づけにおいて非常に重要な概念ですが、全てが固定的なものではありません。「性」といっても、バイナリー（男性と女性の二分法）だけでなく、非バイナリーやトランスジェンダーなど、多様な形態を含みます。

本講義では、このように多様化するジェンダー構造を確認しながら、文学・芸術作品で描かれるジェンダーに始まり、身体、食文化、アニメ、玩具、ポップカルチャーや人権問題にいたる幅広いテーマで、学内外の講師の先生にジェンダーの視点からそれぞれの専門分野についてご講義いただきます。

講義内容例

・アフリカ系アメリカ人女性作家とインターセクショナリティ
・プリキュアの戦い方の文法 ーかわいい肉弾戦ー
・聖書・伝承の女性たちからジェンダーを考える
・環境新文学とジェンダー
・日本のアニメとジェンダー　等

2024年度 第2回講演会

女性の生き方の現在と未来 (仮)

日時：2024年12月10日(火)
講師：永井 暁子先生
(日本女子大学現代女性キャリア研究所所長)
※詳細が決まり次第、お知らせいたします。

おすすめセンター蔵書紹介

光源氏になってはいけない
助川幸逸郎・著
プレジデント社、2011

女たらし、ロリコン、マザコン、自惚れ、リーダー失格…。
源氏物語は、そんな「なってはいけない」大人の事例集なのです。
源氏物語を読んだことのない方にもおすすめの一冊。

京都魔界紀行
志村有弘・編
勉誠出版、2000

雅で華やかな貴族文化が繁栄した京都のイメージとは裏腹に、紫式部のつづった源氏物語の時代は、もののけ、呪い、怨霊の祟りがオンパレードの魔界だった！この本を手に魔界を旅しよう。

VISIT OUR WEBSITE FOR INFO ON OUR NEXT EVENT AND PUBLICATION !

談話会講師募集！

談話会で講師としてお話しくださるセンター員や大学院生を随時募集中です。研究発表の場として、ぜひご活用ください。詳細はセンターまでご相談ください。

「知の散歩道」講師募集！

杉並区立中央図書館で開催する講演イベント「知の散歩道」。
講演テーマは自由。講演スタイルも自由。
一人でもグループでも登壇いただけます。
研究発表の場を探している方、大学院生の方、お気軽にご相談ください。

第7回佐々木みよ子賞 応募論文募集！

2019年度に創設された佐々木みよ子賞も次でもう7回目を数えます。言語・文学専攻の大学院生および同専攻に在籍したことのある方は、来年度春の応募期間をお見逃しなく！詳細はセンターホームページまで。

センター蔵書利用方法

言語・文学研究センターには、900点以上の蔵書資料があります。所蔵資料は、白百合女子大学附属図書館のOPACでは検索できませんのでご注意ください。

・貸し出し利用時間
　言語・文学研究センター開室時間
　(月曜～金曜の9時～17時)

・利用対象者
　▷白百合女子大学教員
　▷言語・文学研究センター構成員
　▷言語・文学専攻の大学院生・研究生
　▷その他、文学部専任教員の了承を得た方

・貸し出し冊数…上限なし

・貸し出し期間…2週間以内

CONTACT US
〒182-8525
調布市緑ヶ丘1-25
白百合女子大学1号館内2階
言語・文学研究センター
Phone：03-3326-5294
Mail：gbkc@shirayuri.ac.jp